

七〇年という歳月

大正一五年二月一日 三田義正は中学校設立の決意を披瀝し諸般の準備に着手、よつて同日をもって本校創立記念日と定めた

母校の歴史年表は、この一項に始まる。いまだ校舎も決まらないままの「創立」であった。だから同年四月一五、一六日の入学試験と四月二二日の第一回入学式は、いま県立図書館がある場所に建っていた岩手県物産陳列所で行なわれた。

四月二四日、市から短期借り受けた中津川河畔の盛岡尋常高等小学校分校教室（現杜陵小学校）で授業が始められた。すでに老朽化し、戸や窓は障子張りの、言ってみれば寺子屋を大きくしたような木造の建物だった。

一ヵ月後の五月二七日には、県から五年間の条件で借り受けた大沢川原の女子師範学校附属小学校旧校舎（現岩手女子高）に移った。附属小学校の以前は盛岡高等女学校（現盛岡二高）が入っていた由緒ある校舎で、上級生のいない一学年だけの一〇〇人余りの生徒には、ゆつたりとして、かなりスペースの余裕があった。や

はり借り物には違いなかったが、汽車から降りて宿屋に落ちついた感じだと当時の生徒は作文に書いている。

五年が経たないうちに、県は財政逼迫のためこの校舎と校地の買い取りもしくは返還を求め、岩手奨学会は県の申し入れ額で買い取ることを決定、校舎・校地は晴れて母校の所有物となる。

昭和一三年、建築学の権威・葛西万司の設計による待望の新校舎が現在地に竣工した。木造の風格ある外観と当時としては最新の設備、東北一と評された講堂が自慢だった。

その偉容にも老朽化が目立ちはじめた昭和五二年四月一五日夜、校舎はあたかも四〇年におよんだ使命を果たし終えたかのように燃え落ちる。

一年四ヵ月後、母校は鉄筋コンクリート地上四階・地下一階建（建坪延べ五二七八平方メートル）の、壁面にレンガを埋め込んだ近代的で瀟洒な姿に生まれ変わった。

以後さらに増築が施された校舎には、いま英語学習用の音響施設や情報処理技術を学ぶパーソナルコンピュータなど時代の先端をいく機器が備えられ、屋上には衛星回線を使用した大学受験講座を受信するためのパラボラアンテナが聳えている。

七〇年の歳月とは、こういうものである。

義正、一八歳で「中学校設立」を投書

しかし、母校の歴史を語るには、創立の年からさらに六〇有余年をさかのぼらなければならぬ。早稲田を語るときに大隈重信の、慶応義塾を語るときに福沢諭吉の人となりを欠かすことができないように、私学の誕生を語るにはまず創立者の人物像に迫らなければならないからである。

三田義正は、文久元年（一八六一）四月二一日、南部藩士・三田義魏と妻キヨの長男として盛岡市で誕生した。幼名を寅太郎と称し、義正は元服してのちの名である。

教育熱心な両親のもと、五、六歳のころから隣家の野田という藩士について漢学を学んだ。漢学の勉強といえば漢文の素読であり、帰宅してから母と一緒に声を合わせて復習に励んだ。

さらに盛岡藩校・作人館と鍛冶町小学校で学んだ義正は、一五歳のとき、文部省直轄の宮城英語学校へ進学するため、盛岡の明治橋から舟で北上川を下り、石巻から陸路をとって仙台に向かった。明治八年五月のことである。

宮城英語学校の修業年限は六年で、教科書にはすべて英語の原書を使用し、外国人の教師が

講義をした。向学心に燃える義正の成績は優秀だった。ところが明治一〇年二月、国の方針によつて宮城英語学校は廃校になってしまう。義正は宮城県立仙台中学校（現仙台一高）として再出発した同校で勉強を続けたが、このころの義正に次のようなエピソードが残っている。

同じ仙台中に通つていた同郷の親友・富田小一郎と義正は、放課後や休日によく下宿で議論した。テーマはその日によつていろいろだったが、郷里の人材育成の話になると二人の議論はとくに熱くなつた。宮城英語学校の時代以来、学校内には出身地ごとの軋轢があつて、南部藩の出身者である義正や富田が「小藩……」などと侮られることも一度ならずあつたからかもしれない。

「まず、我々自身が立派な人材にならないければならないのは言うまでもない。そして、その自信はある。問題は、我々に続く人間を岩手から育てなければならぬということだ。そのいちばんの近道は、小学校しかない岩手に中学校を

建ててもらふことだ」

そう思ひつた義正は、郷里盛岡の新聞に投書を書かせた。二年前に川越千次郎によつて発行されていた『日進新聞』の明治一一年五月二十七日の紙面に、「諸県中学ヲ立テズンパールベカラザル論」と題する義正のその投書が掲載されている。原文は文語体であるが、要約すればおよそ次のような内容である。

国の盛衰強弱は優れた人材の多少によつて決まる。優れた人材の多少は教育がしつかりしているか否かによつて決まる。大国だろうと小国だろうと、才能豊かな賢い人が多ければ栄え強くないわけがない。大国だろうと小国だろうと、才人や賢人が一人もいなければ衰え弱くならないわけがない。だから国の盛衰強弱は優れた人材の多少によつて決まると言うのである。そして才能は生まれながらにして持っているものではなく、必ず努力して身につけるものである。

努力とはいつても、やみくもにやつては能率があがらない。それを系統立てて学校でできれば非常に能率はよくなるはずである。西洋ではすでに大学まであつて、志ある者は必ず学んでいくことができるというではないか。日本でも、ようやく中学校が出来はじめたものの、まだ七校しかない。それでは、小学校を終えたあと、もつと勉強がしたいため中学校に入りたいと思つても、県によつては入れない生徒たちが出てくることになる。これでは志が遂げられない。不公平である。中学校のない県は一日も早く設置すべきである。そうすれば、人材が輩出して県ばかりでなく国を富まし、幸福になつて西洋に負けないほどの国にきつとなるはずである。

この若者らしく気負つた論調の投書を書いたとき、義正は一八歳だった。普通であれば、まだ海のものとも山のものともつかない自分自身の将来を考へるのが精一杯の年頃である。郷土の人材育成どころか、自分自身の育成で頭が一杯なはずの年頃である。百歩譲つて、百人に一人、いや千人に一人ぐらひは、大きな視野を持つて郷土の人材育成などということに思いを馳せた一八歳がいたかもしれない。しかしこの投書を書いた一八歳の青年は、ただひととき思つただけではない。五〇年後、実業の世界で成功をおさめ老境に達したとき、損得を度外視し、決然としてほんとうに中学校の設立へと動きだす



創立者

三田 義正
初代理事長

のである。

この投書が掲載されてからちようど二年後の明治一三年五月、岩手県で最初の中学校である公立岩手中学校（のちの盛岡中学校、現在の盛岡一高）が開校された。義正の投書が県の役人の目に触れ、その決定に影響を与えたのかどうかは知るよしもないが、東京にいた義正は風の便りに公立岩手中学校開校のニュースを聞き、きつと喜んだにちがいない。

津田仙の 学農社に学ぶ

明治一一年七月に仙台中学校を卒業した義正は、さらに上級学校への進学を目的として東京へ向かった。上京にあたり、義正の心にはある変化が生まれていたように思われる。宮城英語学校に入学したことから分かるとおり、これまでの義正の志は英学を学ぶことだった。当時、英学を修めた者は官吏・外交官などの道に進むのが普通であったが、しかし自分が官界に乗り出すには、戊辰戦争で薩長の征東軍に敵対した「賊藩」の出身であるというあまりにも不利な条件を背負っていることに気づきはじめていたのではないだろうか。

このとき東京では、欧米に渡って農業を研究してきた津田仙が私立の農学校「学農社」を興

し、「農は国の本なり」の旗印を掲げて若き学徒を指導していた。同時に、岩手県では県産業振興のため近代農業を大いに研究し奨励もしていた。

進路の選択に迫られていた義正が農業報国の志をかため、学農社に入学したのはその年の一〇月のことである。ここで津田の薫陶を受けたことが、義正のその後の人生を決定づけたと言っても過言ではないだろう。もちろん、我が校の誕生と現在にいたる七〇年の歩みにとつてもである。

津田仙は幕末のころ五代友厚に伴ってアメリカに渡り、明治六年にはウィーンの万国博覧会に出張して洋式農業の研究に打ち込んだ。帰国後は、長い鎖国政策によって立ち遅れた日本を早く欧米諸国に追いつき追い越させようと努力し、みずからの七歳の娘・梅子をもアメリカに留学させた。梅子がのちに津田塾大学を創設、女子教育の先駆者として現在もその名を残していることは周知のとおりである。

学農社は東京麻布の津田の自邸を開放してつくったもので、全国からの若い書生たちでごつた返していた。そういう清新の気風に満ち学問に燃えた雰囲気のなかに、義正も入っていったのである。邸内には欧州野菜が試作され、トマトやアスパラガスなどもすでに作られていた。

また家禽類も飼育されていて、広い視野に立った農学の研究が行なわれていた。講義は耕圃学・

植物学・果実学・農業機器学・普通農学・森林学・家畜学・植物生理学・農業化学・農業経済学・昆虫学・算数学・代数学・幾何学という農業百般に亘り、洋書の入手が難しい時代であったにもかかわらず、教科書はすべて英書だった。

開校三年目の秋に入学した義正は、学校全体を包む進取の空気に心おどらせた。自分と同じような青年たちが、みな目を輝かせている。校長の津田は学者としてだけでなく教育者としても絶大な尊敬を集め、青年たちの憧れの的だった。義正もたちまち、その人格に心酔してしまつた一人だった。農業を通じて優れた人間を育てようとする津田の大きな目標を、すでに感じ取っていたのである。

義正は校長である津田に大変かわいがられた。目をかけられたのに応えるように勉強に励んだので、農業改良策や農業経営にそれなりの自信をもつことができた。やがて四年が過ぎて卒業の年が来たとき、津田ははるばる東北からやって来た青年に対し、心から別れを惜しんでくれた。自信と、学農社で学んだ新知識が社会に出ての実践でどれほど役に立つだろうかという不安をも抱きながら、義正は学農社を、そして東京を後にして帰郷したのだった。明治一四年の夏である。

津田との師弟関係は父子の情愛のようにその後も長くつづいた。後年、「師弟の真の心の触れ合いが存在するのは私学である」と義正が私

学教育の礼賛を惜しまなかったのも頷ける気がする。ましてや一八歳のときに中学校設立を新聞投書で訴えた義正が、そんな理想の学園をふるさと盛岡につくってみたいと思つたことにも。

実業の世界で 成功をおさめる

盛岡に帰つた義正が最初に選んだ仕事は、県庁の勸業世話係だつた。県内各地を回つて農法や作付けを指導するのが仕事で、学農社で学んだ知識を生かし、農民たちに親切に教えて歩いた。ところが、やがて自分の知識と才能を実業の世界で試してみたいという気持ちが抑えがたくわき上がり、一年足らずで県庁を辞すことになる。

県庁を辞めた義正は学農社で学んだことの延長線上にある幅広い事業に手を伸ばした。製糖事業、植林を事業とする山林会社「養立社」の設立、果樹協会の設立などである。

しかしこれらの事業はことごとく失敗した。後に事業の天才をうたわれた義正も、二〇歳を少し越えたばかりのこのころは失敗の連続だったのである。失敗を挽回しようと、政治運動に身を入れたりした。明治二〇年、義正は二六歳で県議會議員に当選、二二年には市議會議員に当選、以後また県議當選と、しばらく政治活動

がつづくが、政争の末にかえつて先祖伝来の田畑を人手に渡す結果ともなつた。失意の果てに、北海道へ渡つて血路を開こうとしたこともあつたといわれる。

この失意の時期、義正に起死回生の息吹を与えたのは、母キヨの激励と、堅い岩に根を張り、無言の教訓を垂れる石割桜だつたという。義正が石割桜を修養の糧としたことは後年よく人に語つたところで、本校校章の由来もここにある。

議員在任中の明治二七年、義正の人生に何度目かの大きな転機が訪れる。盛岡市加賀野で火薬商営業権を店舗ごと譲渡したいという家があることを聞き、地方政治家として政策論争に明け暮れるよりも地に足のついた実業家の道に進むことを強く望む母キヨの熱意もあつて、これを譲り受けることに決断したのである。

ここに「三田火薬販売所」が誕生、火薬は義正にとつて未知の分野ではあつたが、もぢまへの研究中心と時勢を見据えた経営判断が奏功して業績は着々と伸びていった。明治三三年には「三田火薬銃砲店」と名を改め、盛岡市内丸に店舗を移転するとともに函館支店を開設、以後、東京・室蘭・札幌・秋田・小樽と支店網を広げ、義正は一代で財を築いたのであつた。三田火薬銃砲店は昭和四年に「株式会社三田商店」と組織を改め、火薬のほかガラス・セメント・石油などに事業を拡大して現在に至つてゐる。

義正が定めた「商業の要諦は信用にあり、信

用の基礎は信義にあり。而して其の経営の實際に至りては、敵に虚栄を排し実効を旨とせざるべからず」という方針は創業以来脈々と受け継がれており、たとえば昭和四八年の第一次オイルショックに際しては、商品の目先の高値に走つて暴利をむさぼる同業者も現れるなか、三田商店では「従来の営業方針を曲げて得意先の不信を買つたり不当利益をあげることのないように」との社内通達が出され、敵しく周知徹底が図られたという。

義正翁、 人材育成に着手

経営者としての義正は、従業員に対し、「使用する」という意識を離れて「育てる」という姿勢に徹していた。事業の発展を期すには核心となつて他を指導する中心人物を養成しなければならぬ——これが義正が経営者として一貫して抱いていた理念だつた。そして、世間に自分が望むような人物はそういるものではなく、またそうした人物を他から求めようとするのは虫のよすぎる話であるとして、みづから先に立つて人物を育成指導したのである。

しかし、事業が拡大し軌道に乗つてからの義正は、周囲によくこんなことを漏らしたという。「金はある。仕事もある。しかし、なぜ人はい

ないのだろうか」

この言葉には、「自分の店に……」というだけではなく、「郷土に……」「国に……」という意味が言外にこめられていただろう。加速度的に三田火薬銃砲店の財産が増えていくにつれ、義正は若いころから温め続けてきたひとつの思いが脳裏にめらめらと燃え上がるのを抑えることができなくなった。

「店は磐石になった。これからは、それと並行して人材育成にあたらなければ。いよいよ準備する 때가 きた ようだ」

その第一歩が、明治三十一年一〇月の「岩手育英会」の創設である。実弟の三田俊次郎、義正の長年の親友である富田小一郎、医師であり盛岡中学校の教師でもある三浦直道の力を借り、ここから岩手を背負っていく次の世代を育てていこうというものだった。会則には次のようにある。

「第一条 本会は岩手県出身の青年にして学術操行優等、身体強壯なる者に学費を貸与して、これを大成せしむるをもって目的とす」

「第三条 会員は五拾錢以上五カ年または一時に金二拾円以上出金するものとす」

義正を含め四人で始まった岩手奨学会であったが、資金繰りも順調にいき、創設から一年五カ月後の明治三十三年三月には記念すべき最初の貸費生が決定された。第二高等学校大学予科一部（文科）一年生の鈴木卓苗、すなわち後に義

正が我が岩手中学校を創設したとき、初代校長として迎えられる人物である。やがて自分が学校を創立した暁には、この岩手奨学会から巣立っていった人材に手伝ってもらいたいと義正は漠然と考えていたかもしれない。しかしもちろん、この明治三十三年の時点で、二人は二〇数年後に私立中学校創立者と初代校長というかたちで再会しようとは想像もしていなかったであろう。縁とは不思議なものである。

話を本校の創立に進めるまえに、興味深いエピソードを紹介しておきたい。

中学校の設立とは別に、義正が盛岡加賀野にある川留稻荷神社境内の所有地に本格的な図書館を建てようとしていたことだ。まず境内の東端に館長用の住宅を建て、館長に予定していた富田小一郎に住んでもらい、彼を図書館視察のため関東や関西へ出張させた。富田も義正の熱意に応えて都会の図書館を詳しく見聞して戻り、設計図を書いたり購入すべき図書を検討したりしていたが、そんな矢先、県が県立図書館の建設を発表したのである。この報に接した義正は、かなり具体的に煮詰まっていたみずからの計画を敢然と中止した。それまでの実情を知っていた周囲の人たちは「こちらが先に考えていたのだから、盛岡のためにもやるべきだ」と主張したが、義正はそんな声を静かに止めた。そういう引き際もじつに早かった。義正の人材育成に対する情熱の深さと広さ、他より一步先んじる

先見の明、そして謙虚さを物語る話だとは言えないだろうか。

中学校創立を 一時は断念？

大正一一年一〇月、義正翁は貴族院多額納税議員に当選した。この任期は大正一四年六月まで続く。いまや功成り名を遂げた翁の胸中は、自分を育ててくれたこの盛岡に、人材育成の殿堂をどうしてもつくってみたいという思いで溢れていた。いよいよそのときが来たのである。

義正翁はまず弟・俊次郎を通じて県の学務課長・関壮二に中学校設立の希望があることを告げた。翁と関はまだ面識がなかったが、俊次郎と関は親しい間柄であった。

翁の意気を感じた関は、さっそく学校経営計画書を作成する。当時、文部省は最小限五百万円の財団法人をもって設立許可の方針であったので、関は五百万円、七百万円、一〇百万円の三案をつくったという。

周到な義正翁は、関が作った計画書を携えて、衆議院議員・鎌田栄吉、文部次官・南弘、帝国教育会長・柳沢政太郎、内閣書記官・高橋光威、元岩手県知事・柿沼竹雄らの教育関係者に相談した。相談を持ちかけられた人々の反応は「一〇万や二〇万ではできない。一〇〇万はかかる」



第2代校長
柄内曾次郎



校長 理事
鈴木卓苗



理事
北田親氏



理事
鏡保之助

「二〇万でもできるだろうが……」と様々であった。その後しばらく沈黙考のときを過ごした翁は、大正一四年のある日、関を自宅に訪ねて意外にもこう言った。

「とても一〇万や二〇万で中学校を建てても、後日他人に迷惑をかけてはならないからやめた」

だがその晩も二人の話はやはり教育のこととなった。二人は現代物質教育の弊害を嘆き、「教育は精神で、これがなければ教育はない。」

もつと漢学に基礎を置いた、緊張した精神教育による生徒の養成が必要である」という結論で一致し、意気投合した。話がはずみ、翁が関邸を辞したのは一一時過ぎであった。帰り道、義正翁の心は決まった。

翌朝早く、翁は県庁におもむいた。関はまだだったので、電話で出庁をうながした。

「昨夜はお断りしたが、どうも現代学生の意志の薄弱なのは憤慨にたえない。一〇万円を出すからどうかやってみよう」

「それは困る」と関は困惑し逡巡したものの、翁の熱意におされて引き受けざるをえなかった。

やるからには理事に人を得なければならぬと、義正翁は盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）校長の鏡保之助を訪ねた。鏡は、一文の利もあがらぬことに大金を投じるのは偉いことだ、と理事就任を承諾した。次に市長の北田親氏を訪ねると、直ちに快諾し、理事になってくれた。

こうして大正一五年二月一日、記念すべき紀元節の日、鏡、北田、関が出席した三田義正宅での会合で、翁はあらためて中学校設立の決意を表明した。具体的な開校準備を経て、財団法人岩手奨学会（義正翁の中学校設置費一〇万円と母キヨ名義の育英資金二万円、計二二万円）の設立および岩手中学校の設置を文部省へ申請したのが三月三十一日、無事認可されたのは四月一九日のことである。

理事長にはもちろん義正翁がなり、四人の理事には海軍大将・柄内曾次郎、盛岡高等農林学校校長・鏡保之助、盛岡市長・北田親氏、鈴木卓苗（理事兼校長）という錚々たる顔触れでの船出だった。

開校までの紆余曲折

ところで、二月一日の創立宣言の日から三月三十一日の申請にたどりつくまでに、紆余曲折がなかったわけではない。

ひとつは校舎問題である。当初、校舎としては大沢川原の女子師範学校附属小学校を予定していた。この年四月から仁王小学校が師範附属として代用されることになり、大沢川原の校舎は空くことになっていたのである。二月二六日、義正翁は鏡、北田、関らを帯同して、岩手県知

事得能佳吉を訪ね、県の所有物である大沢川原校舎の借受けを懇請した。その場では借用期間を五カ年と定めていったんその承諾を得たのだが、しかしその後県当局の態度が煮え切らず、なかなか貸与の決定がおりなかった。「一富豪の事業に便宜を与えると他から不満が出るだろうから許可しないように、という意見もありました」と得能が後日述べているように、一部に反対があったのである。内務部長なども反対であった。新聞は「三田義正氏の私塾行悩む」と書いた。このままでは文部省への申請が遅れる、と翁らは非常に焦った。三月三日夜、翁はふたび鏡、北田、関とともに知事官舎に得能を訪ねて陳情を重ねた。得能は同情的であった。ついに県参事会で校舎貸付が決定したのは、三月三〇日のことであった。

ただ、承認は得たものの、種々の事情で附属小学校の移転が遅れた。そのため、とりあえず市から盛岡尋常高等小学校分校教室を借り受けての授業開始となったのは冒頭に紹介したとおりである。

もうひとつは、校名問題である。しばらく校名は未定のままで、新聞は「三田氏の私塾」「第二中学校」「私立中学校」などと呼んでいたが、三月末、「岩手中学校」と正式に発表された。義正翁の裁断である。

ありふれた名称だとの評もあったが、そのありふれたところが義正流であった。「盛岡」と

言わず「岩手」としたのは、迎え入れる生徒を盛岡に限らずひろく県下に推し及ぼす気持ちからであった。また「第二中学校」としなかったのは、本県最初で当時盛岡では唯一の中学校だった盛岡中学を意識して名づけようとは思わなかったからだ。

校名がまだ決まらないとき、義正翁を訪ねたある客が進言した。

「米国では、その創立者の名を校名に冠することが多い。ジョンズ・ホプキンス大学などはその好例です。三田さんの中学校もその例にならない、三田中学校としてはどうですか」

これを聞いた翁は色をなして言った。

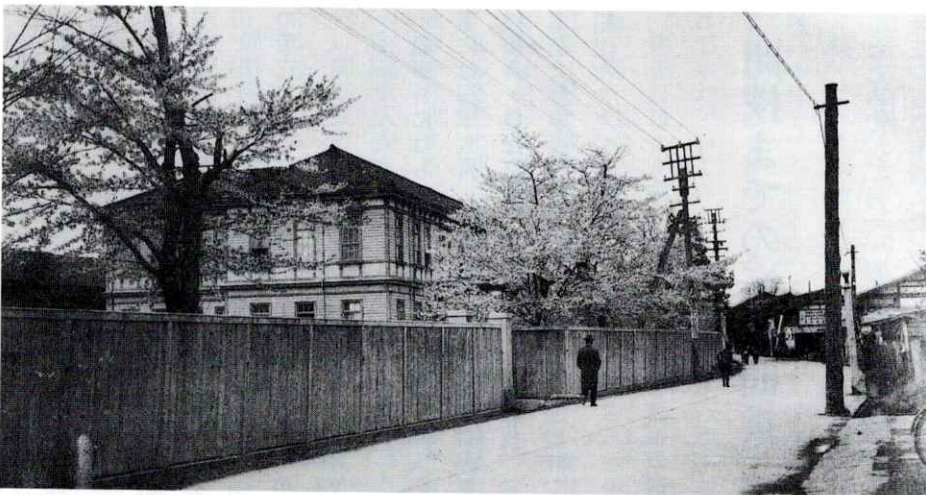
「私は学界の現状を見、多数の学童と父兄の表情を察してこの挙に出ただけです。ですから、自分の姓を校名に冠するようなことは、まさに売名行為そのもので、私のいちばん嫌いなことです」

客は義正翁の高潔な決意に感じて、前言を謝したという。

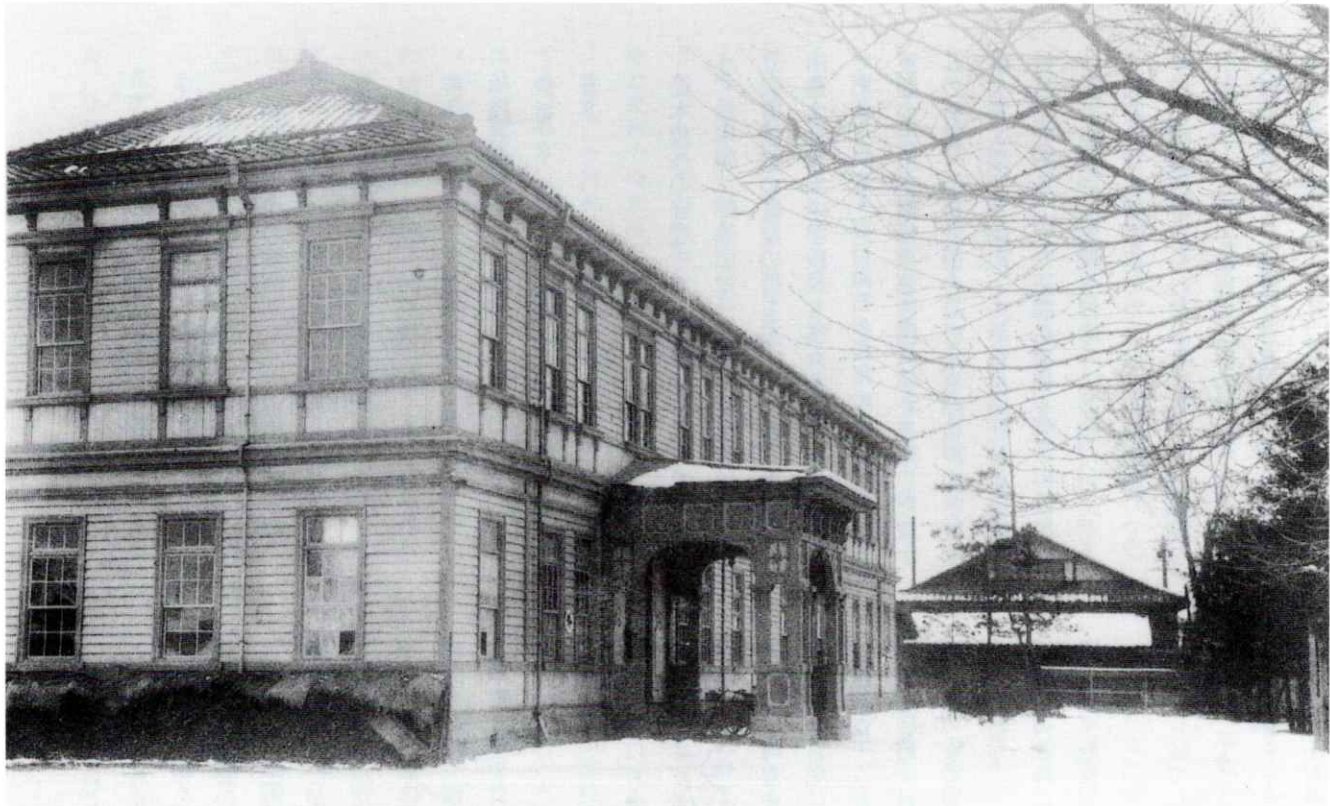
実際、翁が「三田中学校」と命名しなかったことは世間にとつてちょっとした驚きだったらしく、大正一五年四月一日の「岩手毎日新聞」はこの校名問題を次のように論評している。

「方今滔々たる社会その為す所、射利にあらずんば売名にあらざるなし、然るに氏の今回の挙は全く犠牲的精神に出で、その高潔所謂貪夫をして廉ならしめ懦夫をして起たしむるものなく

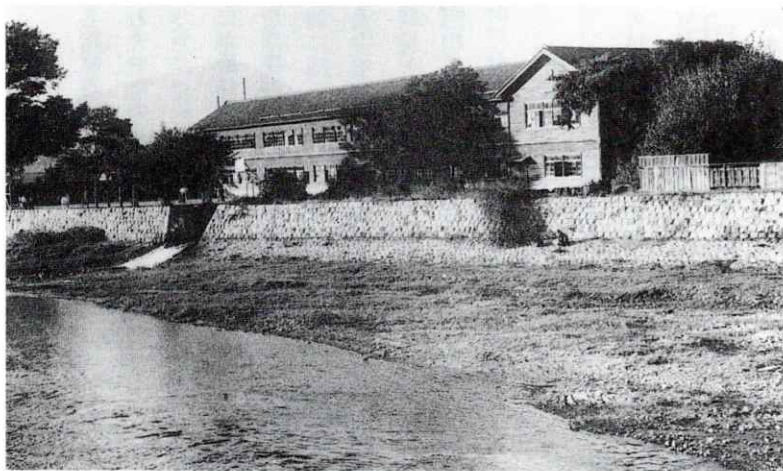
んばあらず、氏の此の精神を伝えて以て同校の校風を成し、高潔義勇の士を輩出せんや必矣、吾人は同校に対し、多大の期待を有するも、豈徒爾なりとせんや」



大沢川原の通りから見る校舎（昭和12年）



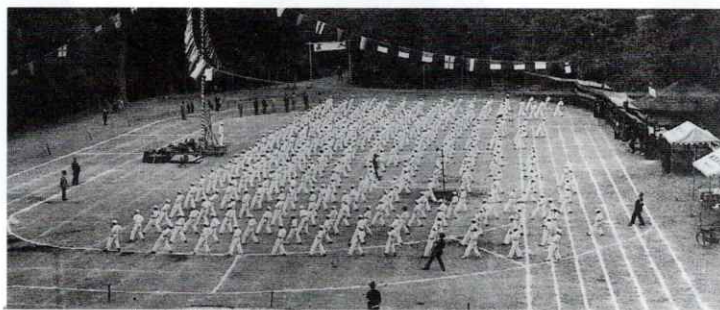
大沢川原の校舎（昭和9年）



中津川から見た大沢川原校舎（昭和12年）



大沢川原校舎正門（昭和9年）



岩手公園広場を利用したの運動会（昭和9年）